日本中国語学会々報　2018年12月

https://ss1.xrea.com/www.chilin.jp/

◆目次◆

ご挨拶　大西克也（会長）……1
2018年度全国大会総括……2
支部例会実施報告　2018.6－2018.12……5
会議報告……12
例会および全国大会開催、IACL-27 開催のお知らせ……18
『中国語学』電子化のお知らせ……19
事務局からのお知らせ……19
［資料 1］『中国語学』投稿規程（2018 年 11 月改訂）……21
［資料 2］『中国語学』執筆要領（2018 年 11 月改訂）……23

ご挨拶　大西克也（日本中国語学会会長）

2018 年 11 月 3 日、4 日両日、本年度の全国大会が神戸市外国語大学を会場に開催されました。大会を引き受けてくださった開催校のすべてのスタッフの皆さん、また大会運営委員会の皆さんには心からお礼申し上げます。それぞれの立場において、開催が決まった時から、二日間の大会を終えられるまで、気苦労が絶えなかったことでしょう。

思い起こせば 2001 年度全国大会を勤務校で引き受けた際、私は会計の担当でしたが、大会が近づくにつれ、当日つり銭が不足する夢を見るなど、なかなか大変な思いをしたものでした。当時大会運営委員会は設置されておらず、発表の採択も含めて運営はすべて開催校の裁量に委ねられていたのです。しかし今ほど厳しい審査もなく、国外からの参加者も少なく、託児室も設置されず、今に比べるとある意味長閑な時代であったといえるかもしれません。

さて、今年の会員総会では学会の事業に関して新しい動きをご報告することができました。まずは学会誌『中国語学』の電子化です。詳細はニューズレター末尾のお知らせに譲りますが、2019 年の 266 号から電子媒体としても刊行されることになりました。検討にあたって主導的な役割を果たしてくださった編集委員会の秋谷委員長とウェブリソース委員会の鈴木委員長には大変ご苦労をおかけしました。当面は紙媒体を並行する予定ですが、電子媒体だけにするのが良いのかどうかは実は悩ましい問題です。電子媒体は便利なようでいて、その実体は人の目に見えないバイナリデータに過ぎません。画面上に表示する手段が失われると用をなさなくなります。二千年

以上の時を経て発掘された簡牘が解読されるように、数百年後の人々が果たして『中国語学』を目にすることができる保証はあるのでしょうか。デジタル化は文献の継承の形を大きく変える可能性があるように思います。

二つ目は、「中国語学セミナー」の開催が学会の事業として承認されたことです。本学会はこれまで主として研究成果の交流と発信の場としての機能を果たしてきました。しかし我が国における人文学の現状を振り返るとき、最新の研究発表だけではなく、大学における中国語学教育の補完・支援の役割を担う必要があるとの認識のもとに本事業を理事会に提案し、小野理事を座長とする WG において検討を進めて頂きました。最初の試みとして、2019 年 7 月または 9 月に東京を会場に 3 名の講師によるセミナーを開催する予定です。詳細については来春年号が代わる頃をめどにお知らせしたいと思います。多数の方のご参加を期待しています。

2019 年度の全国大会はお茶の水女子大学にお引き受けいただくことになりました。異例の遅い依頼にも拘わらずご快諾くださった伊藤さとみ先生をはじめとするお茶大の先生方には感謝の言葉もありません。会長職を拝命して約半年ですが、人はみなそれぞれに事情を抱え、私自身もまた多くの方々のご厚意に助けられながら危うい足取りで歩んでいることを痛感しています。今後ともご支援、ご鞭撻どうぞよろしくお願い申し上げます。

2018 年度全国大会総括

Ⅰ．今年度大会総括

第 68 回大会は、神戸市外国語大学（神戸市西区）を会場に、11 月 3 日（土）と 4 日（日）に開催された。

(1) 参加者数

参加者総数は 276 名、うち一般参加者が 275 名、招待者 1 名であった。

(2) 総評

今年度の全国大会は、ほぼ例年通り 11 月の第一週末に開催された。開催校は神戸市西郊の丘陵地帯にある学園都市に位置し、文教地区らしい落ちついた雰囲気の中で大会を開催することができた。幸い天候にも恵まれ、参加者は秋らしい爽やかな風を感じながら、会場へと足を運ばれたことと思う。

開催校の神戸市外大の教員・学生の皆さんには、大会までの長きにわたって周到かつ万全の準備をしていただいた。大会を有意義かつ円満に開催できたのは、ひとえに開催校の皆さんの献身的なご尽力によるものであり、この場を借りて厚くお礼申し上げたい。会場で特に印象に残ったのは、進行係として分科会会場に待機していた学生の皆さんの真摯な態度であった。定時進行に気を配り、司会者からの問いかけにも的確に答えるなど職務に精励するとともに、熱心に研究発表に聞き入っておられた方も少なくなかったように感じられた。今回このような形で学会に参加されたことが少しでも若い方々の刺激になるのならば、これも大会の大切な意義の一つであろうと思う。

大会初日は開会式に続いて、現代語文法の理論的研究におけるお二人の泰斗の招待講演が行われた。

最初の講演者は北京語言大学の崔希亮教授であった。たいへん残念なことに、本務校の事情から崔教授の来日は大会直前になって急遽取りやめとなり、やむを得ずビデオ講演という形式となったが、司会を務められた任鷹教授（神戸市外国語大学）の軽妙かつユーモアあふれる進行により、会場は大いに盛り上がった。

崔教授は「认知语言学与汉语语法研究」との演題で、現代中国語の文法研究に対する認知言語学的アプローチについて、ご自身のものも含めた中国大陸における代表的な研究を中心に、その手法と成果を紹介された。講演では連体修飾構造・品詞分類・文法化・有界と無界・動詞句構造等々の課題に対し、プロトタイプ理論といった認知言語学的アプローチの有用性を強調された。

二人目の講演者は国立清華大学の蔡維天教授であった。崔教授は「談漢語的語氣顯著性及其句法—語用介面研究」との演題で、現代中国語文法における構造と意味の問題について論じられた。講演では生成文法の立場による Luigi Rizzi 教授の統語構造分析に基づきながら、従来の研究成果を踏まえそれが中国語にも適用されることを確認した上で、疑問詞の非典型的用法、数量詞句などに見られる隠在的なモダリティ等を例に挙げながら、現代中国語の文法研究における統語構造のカートグラフフィーの有用性を説くとともに、それが一般理論の構築に還元されるべきことを強調された。

両教授の講演が充実したものであっただけに、本来ならば異なるアプローチからの対話が会場において実現するはずであったことが、少々心残りに思われた。

今年度のワークショップは、2 グループがセッションを行った。

吉川雅之会員の企画による「域外資料から近代口語を問う──文献言語学の挑戦と課題」では、1990 年代以降中国語学における一大フロンティアを形成してきた、明朝以来の欧文資料およびそれに準ずる資料に基づく、研究の軌跡と最先端のトピックについての発表が行われた。まずコンセプトと研究史について吉川会員が報告し、続いて同会員が粤語、千葉謙悟会員が官話、クリスティーヌ・ラマール会員が客家語について論じた後、大阪大学の岸本恵実准教授から日本語学における欧文資料の活用状況が紹介された。

遠藤光暁会員の企画による「汉语方言和普通话里的声调特性和时长分布模式」では、普通話を含む漢語諸方言の実例に基づきながら、声調の特性や時間長のパターン等についての多様な発表が行われた。具体的には、遠藤会員が曲折調の誕生と消失、山東師範大学の王紅娟副教授が晋語上党片方言の声調特性、八木堅二会員が軽声の分布と拡散、南開大学の王萍副教授が普通話における文タイプごとの時間長のパターンについて報告を行った。いずれの企画においても会場との間に活発な意見の交換が行われ、充実した内容となった。

ワークショップに関連して、一点付記しておきたい。

前回（第 67 回）大会においては、残念なことにワークショップの応募がゼロであった。周知の通りワークショップの応募は年々減少傾向にあったためにその継続を危ぶむ声も出ていたが、今大会では吉川・遠藤両会員のご尽力により、上記のような有意義かつ充実し

た企画を開催することができた。とりわけ今回の発表者は中堅・若手の会員や研究者が主体となっており、この点においてワークショップ本来の意義をより明確に示したものと言える。公募制のワークショップは講演やシンポジウムとは異なり、中堅・若手会員のより積極的な参加を意図したものである。来年以降も会員各位の積極的な応募を期待したい。

大会二日目は分科会研究発表とポスターセッションが行われた(それぞれ46件と11件)。ポスターセッションは昨年同様、二日目の昼の時間帯に開催された。今回は隣り合う三つの教室に分かれて開催されたが、この点は特に問題にならなかったであろう。随所できわめて活発な議論が展開されたことは言うまでもない。

開催校のご尽力により、今年度も託児室を開設することができ、3 名の利用があった。この 2 年は 0〜1 名の利用であったので、その存在が会員の間で認知されつつあるのではないかと考えている。今後も開催校と協力しながら、継続して託児室を開設できるよう努めていきたい。

なお、今大会から予稿集の編集作業を開催校から委員会に移管した。これで研究発表の査読と予稿集の編集という二つの過重な負担が、開催校から取り除かれたことになる。もちろん開催校の重い負担はこれにとどまらないものの、本委員会が設置された当初の目的は、ある程度達成されたのではないかと考えている。将来的には会員数の減少も見込まれる中で、今後いかにして安定的に全国大会を開催していくかは本委員会に課せられた重大な任務であり、会員各位のご協力を得つつ委員会としての職責を全うしていきたい。

(3) 改善点・反省点

本委員会では毎年大会後の総括を承けて一定の改善点を積み上げてきたが（昨年までの「大会総括」を参照)、どうしてもいくつかの問題点は残ってしまった。

まず、研究発表応募書類中の「審査用要旨」に、規定字数を超過するものが複数見られ、そのうち超過程度の甚だしいもの 1 件を規定違反により失格とした。

また、当日の分科会発表に関しては、分科会の司会者から、予稿集の内容と会場で用いられた PowerPoint 画面との間に著しい齟齬のある発表が複数見られたとの報告が寄せられた。現在ではほとんどの発表者が PowerPoint を併用しているが、予稿集との関係でその使用法に常識を欠くものが散見される。今年度は「予稿集原稿作成要領」においてその点について注意を促し、一定の効果はあったように思われるが、やはり徹底はされていない。今後の課題として、例えば分科会の冒頭において司会者から口頭で注意を促す等の対策が必要かどうか、委員会において検討していきたい。

Ⅱ. 来年度の全国大会にむけて

(1) 来年度の第 69 回大会は、お茶の水女子大学（東京都文京区）で開催される（開催日は未定。追ってウェブサイトで公表する)。

(2) 来年度の企画は現在開催校において検討中であるが、初日にワークショップ、二日目に分科会研究発表及びポスターセッションを行う方針である。ワークショップの応募に関しては、2 月末までに学会ウェブサイトに応募要項を掲載するので参照されたい。

(3) 来年度も研究発表の応募規定はウェブサイトでの告知のみとする。4 月初旬頃までに学会ウェブサイトに掲載されるので、その要領に沿って応募されたい。

来年度より予稿集の電子化を実施する。これに伴い「予稿集作成要領」の改訂を予定しているので、発表希望者は注意されたい。なお、当面は冊子体の予稿集も同時に発行するが、移行期間終了後は冊子体を廃止する。廃止時期については今後委員会において検討する。

（大会運営委員会）

支部例会実施報告　2018.6 - 2018.12

◆北海道支部例会

◇2018 年 9 月 21 日（金）北海道大学高等教育推進機構 2 階・E208 講義室

・楊彩虹（北海道大学）：重複を表す副詞“又”“再”“还”について

重複を表す中国語の副詞“又”、“再”、“还”は以前から研究されているものの、その違いについてはまだ明らかにされていない。本研究では、これらの副詞の共通点と相違点を検討し、以下のことを明らかにした。“又”は“已然”であるのに対して、“再”、“还”は“未然”である。意味的な違いは、“又”、“再”は繰り返しを表すが、“还”は継続の意味を持っている点にある。構文的には、“又”、“还”は能願動詞の前に置くが、“再”は能願動詞の後に置くという違いがある。また、“再”は動詞の重ね型、数量詞、“请”、勧誘の“吧”と共起することができるが、“还”はできない。これらの違いを分析し、一貫した解釈を試みた。

・中村真衣佳（北海道大学・院）：程度副詞“比较”と「わりと」の評価的用法における意味機能

程度副詞“比较”と「わりと」は、ともに比較を表す意味をもつが、“比较”は「わりと」よりも表す程度の幅が広いことが大島(1997)、前田(2013)により指摘されている。しかし、これらの評価的用法については、大島(1997)や謝(2010)で指摘があるのみで検討の余地を残している。本発表では、これら程度副詞の評価的用法を加藤(2016)の文脈の理論的枠組みを使用して①〈自慢〉②〈謙遜〉③〈卑下〉④〈賞賛〉⑤〈やわらげ〉⑥〈越権行為〉⑦〈中立〉という 7 種類に分類し対照する。そして、両者に共通の意味機能を明らかにしたうえで、“比较”と「わりと」が各々持つ特有の意味機能を明らかにする。

・章天明（小樽商科大学）：语义演变和功能再生---以“就是”为例

本文主要是对“就是”的语义网络做一个构架和分析，解释“就是”的语义演变和功能再生的对应关系。“就是”在形式上从短语到副词再到语气词、连词，最后发展到独立的话语标记的虚化过程，也是语义从“表客观肯定判断--限定--评价--强调--衔接--关联--主观肯定”的演变过程。从表义的“客观叙述肯定”回到“主观强调肯定”，是一种语义上的“再归”，语义再归带来的表达功能上的变化便是“就是”具有了很强的主观语用否定功能。

・劉陽（東北大学・院）：述語に接続する中国語助詞「了 1」の意味について

従来の研究においては、述語に接続する中国語助詞「了」、通称「了 1」の意味について、「完成」と「実現」の対立、「持続」の意味の有無という２つの論争点が存在する（呂 1980、劉 1988、競 1993、陳 2007）。筆者は、フランス語やタイ語といった 5 つの言語における「了 1」に対応すると考えられる「完了相（perfective）」を示す語の意味と対照しながら、「了 1」の意味用法を分析し、①「了 1」は「事態の終了」と「事態の開始」という 2 つの意味をもっている；②「事態の開始」は事態が持続していることを含意する；③「終了」および「開始」の意味選択、また「持続」の含意の有無は、述語の語彙的アスペクトに関係している、ということを明らかにした。

・鈴木慶夏（神奈川大学）：「“(是)……的”構文」から「参考情報ぬきだし構文」へ―文法研究の成果をいかに教育用途に加工するか―

中国語教育の現場で解決が急務な課題として、中国語学の研究成果を（そのまま持ち込むのではなく）、現場の問題に合わせた加工を施し応用することがある。“(是)……的”構文は、国内外で文法研究の厚い蓄積があり、木村 2012 でも新たな学術的到達点が示された。しかし、教育現場では、依然として、学習者の多くが当該形式の使用を回避することや、使用すべき時に“(是)……了”を過剰に産出することが指摘されている（郭春貴 2001、陆庆和 2006、谢福 2010、孙海平 2010 等）。本発表では、文法研究の成果を教育現場の課題解決に還元する加工方法について試案を提起し、基礎研究をふまえた応用研究のあり方を考察する。

◆関東支部例会

◇2018 年 6 月 30 日（土）首都大学東京・南大沢キャンパス

・任暁雪（九州大学・院）：現代中国語人称詞「人家」の機能について–「別人」「他」との交代の可能性の観点から–

本発表は、現代中国語人称詞「人家」の機能を、一般に「人家」と類似する機能を持つと言われる「別人」、「他」、「那（个）人」との交替の可能性という観点から考察するものである。まず、先行研究で指摘された「*人家是谁？」の非文性を手がかりにしながら、主に『中日対訳コーパス』において「人家」が出現する場合の特徴を分析することにより、「人家」は文脈指示機能のみだけで現場指示機能は持たないということを示した。次に、「人家」と「別人」、「他」、「那（个）人」との交替の可能性から、「人家」の文脈指示機能には文のアスペクト、先行詞となる名詞句の性質、副詞の性質等が関与するということを明らかにした。

・劉淼（首都大学東京・非常勤講師）：会話引用表現の歴史的変遷―会話文の前の“道”を中心に―

小説の地の文と会話文をつなぐ役割をする語句（「『……』と言って」に当たる）は、時代や文体によって異なる。文言文では、“曰”、“云”、“言”などを会話や引用文の前に置く。一方、明清白話小説では“（説）道”、“説”などを会話文の前に置く。現代小説では、会話文の前に置かれるのは多くの場合“说”で、“道”の用例は相対的に少ない。清から民国にかけて“道”から“説”に変化したのではないだろうか。張猛（2003）で『左傳』の“曰”、“云”に言及しているほかに、この表現に注目した研究は少ない。今回は『金瓶梅詞話』以降、民国までの白話小説を調査対象とし、会話文の前の“道”の歴史的変遷について考察する。

・松本洋子（外務省研修所・非常勤講師）：詩を利用した声調指導について

中国語の声調の習得は一部の学習者には難関である。筆者は、声調指導の最初期に王之渙《登鸛雀楼》や李白《早发白帝城》の一連の声調と日本語「マー」「マーミー」「マーミームー」の組み合わせで指導している。いきなり「声調＋中国語子音＋中国語母音」の組み合わせは学習者の負担が大きいので、まずは声調のみを学習者の聴覚に植え付けることを目的とする。一般的に学習者が不得意なのは、２声＋１声、２声＋２声、２声＋４声、３声＋２声などであり、また１声が下がってしまい、弱い４声のようになってしまうこともある。中級でもまだ声調が不確かな学習者を指導することがあり、最近指導した学習者の録音と指導のポイントを紹介する。

◇2018 年 12 月 8 日(土) お茶の水女子大学･文教育学部

・永江貴子（拓殖大学）：“帮”を用いた文のポライトネス性について

永江（2005)、永江(2008)において当時のコーパスやアンケート調査に基づき、要求表現における“帮我”が依頼のポライトネスマーカーになりつつあると述べた。この“帮”を用いた文であるが、近年、中国大陸において以前は受益者を導く語として“给”を用いた文で“帮”を用いる例が増加しているようだ。また、店員にコーヒーを注文する場合に“帮我做杯咖啡。”と更なる文法化が進んだ例も見られる。この“帮”を用いることでポライトネスを示す例、更には美化語として用いる例を提示し、ポライトネスを意図する場面で何故多用されるのかに関し、“帮”の特性からそのメカニズムを述べる。

・安藤好恵（大東文化大学）：中国語学習者の習得状況に関わる要因の探索

同程度の学習環境にありながら習得状況に差が見られる要因の一つとして、学習者の多様性が挙げられる。本発表では、中国語学習者の多様性として入学時の英語スコア、ビリーフ、学習への取組み方を取り上げ、中国語の習得状況との関連性を調査した。大学で中国語を専攻する 1 年生を対象とし、学年末に行われた学習到達度を測る試験の得点を用いて層別化を行い、得点に影響を与える項目について決定木分析を用いて検討した。その結果、中国語の習得状況に影響を与える可能性のある要因として６つの要因が示された。この結果に基づき、学習者の多様性と習得状況に配慮した学習支援のあり方について考察する。

◆東海支部例会

◇2018 年 12 月 1 日（土）名城大学 天白キャンパス

・布目孝子（名古屋大学・院）：日本語を第一言語とする中国語初学者のそり舌音習得研究

中国語のそり舌音は日本人学習者にとって習得が困難な音の一つである。本研究はそり舌音のうち接近音を除く摩擦音および有気・無気破擦音を対象とする。中国語初学者の発音特徴及び習得過程の観察を目的とし、約 4 ヶ月間 33 名の日本人初学者の発音を録音し音響分析を行った。学習者のそり舌音は母語話者に比べ調音位置が奥にあること、zh、ch、sh のうち zh、ch の習得速度が sh より遅い傾向にあることが分かった。習得過程においては学習時間の増加に伴い調音位置がより奥に移動している現象が見られた。それらの結果に基づきそり舌音エラーの原因を考察し指導法を検討する。

・高謙（名古屋大学・院）：“让”構文の成立を支える統合的要因及び意味的動機付け－「授与」から「使役」へ－

“让”は「譲る」を基本義とした授与動詞の一種である。“让”の使役マーカーとしての用

法は宋代を起源とし、現代に至るまでに「指示」「許可」「放任」「誘発」といった複数の使役義を担うようになった。“让”構文が表す使役義は授与義から文法化された結果であることは夙に指摘されている（蒋紹愚 2002）ものの、“让”自体の意味的変化に注目し、その変化を誘発した要因と変化の段階性について言及したものは多くない。本発表では“让”構文における他の構成要素が“让”の意味変化を生み出す主な要因であると考え、“让”構文が「授与」と「使役」の意味を兼用し得る動機付けとその拡張プロセスについて、通時的・共時的な観点から論じていく。

・孟醒（名古屋大学・院）：語気副詞“还是”について－「案の定」のニュアンスを表す場合－

語気副詞“还是”を“大象鼻子长。”という文中に置く場合、“A 大象 B 鼻子 C 长。”における A～C の三か所が想定しうる。そして、“还是”の置かれる位置が異なると、それぞれ異なる意味を表すことになる。副詞“还是”の表す意味は一般に、①持続、②意外性、③比較した上での判断・提案の三点であるとされる。しかし、“大象鼻子还是长啊。”［象の鼻はやっぱり長いね。］の場合、上記の①②③に当てはまらず、「案の定」のニュアンスを表す。本発表では、従来指摘されてきた上記三点以外の“还是”の用法に着目し、その統語的制約、表出機能（感嘆・評価）、および当該の用法と①③とのリンクの有無などについて、考察を試みる。

・橋本永貢子（岐阜大学）：方式、原因、理由の接点－“怎么”と“为什么”をめぐって

“怎么”は、方式または原因を問う疑問詞であるが、そもそも方式と原因はなぜ同一の語彙で問いうるのだろうか。また原因を問う場合、“怎么”のほかに“为什么”を用いることもあるが、その用法の差異を、方式からの連続で捉えることは可能だろうか。本発表では、こうした疑問点を出発点に、方式から原因への拡張のメカニズムを探り、また原因と理由との接点を考察していく。そして、原因を表す“怎么”の用法が反語から来る認識レベルの用法であること、“为什么”が主として事態レベルで用いられるものであることを示したい。

◆関西支部例会

◇2018 年 6 月 17 日（日) 関西学院大学大阪梅田キャンパス

・張聞（神戸市外国語大学・院）：“地”的句法功能及其认知“入场”作用

本发表主要先对“地”的功能加以梳理，然后以此为突破点分析“地”隐现的深层理据和动因。我们认为，“地”作用在于可以对其修饰对象起到更为突出的描绘作用，并能使听话人在认知中将话语与场景衔接起来，以达到认知“入场”的目的。具体来说，就是“地”前成分在说话人的认知中有的倾向于外显，有的则倾向于内隐。具有外显性特征的词语可以直接修饰后面的中心语，不需要带“地”就可以入场；具有内隐性特征的词语不具备直接饰中心语的能力，需要带“地”来使具有内隐特征的“地”前成分外显化，激活其描写性特征，并提升其语义明晰度和信息价值，从而使状中结构得以成立，即达到认知“入场” 的目的。

・張茜（神戸市外国語大学・院）：副词“倒”的“行、知、言”三域考察

本文以现代汉语中的副词“倒”为考察对象，由于“倒”的语义和功能比较复杂，所以我们从“倒”的基本语义特征入手，拟将“倒”的种种用法归入沈家煊（2003）所界定的既有区别又有联系的三个概念域：行域、知域、言域，并对其在不同概念域的用法加以描述。从这个角度将副词“倒”分为倒行、倒知、倒言。“倒行”表示“行态”与预期相反；“倒知”表示“知态”与预期相反；“倒言”表示“言态”与预期相反。“倒”的不同用法应为其基本意义在不同的概念域的呈现与引申，但语言范畴的扩展是渐进的过程，“倒”在不同的概念域的用法并不都是界限

明確的，而是既有区别又有联系的。

・楊虹（鹿児島県立短期大学）：映画における感情表出の感動詞の比較―日本語と中国語の対応関係を探って―

本研究は、映画等のセリフから、日本語で使用頻度の高い感動詞とその中国語吹替え版での訳を比較し、両言語の頻出感動詞の機能と形式の対応関係を整理した。その結果、日本語では、「あー」、「えー」、「へー」の順に多く見られ、これらの感動詞は、話者の意外な気持ちを表し、生起する文脈により、賛嘆／感心などポジティブな感情表出を表す場合もあれば、不満／落胆といったネガティブな感情表現として用いる場合もある。これらの感動詞の中国語訳として用いられるのは、「啊」「哎呀／哎哟」「哟」「唉」「嗐」「哇」「哇哦」「嗯？」であり、中国語と日本語の頻出感動詞の対応関係について、使い分けに一定の傾向が見られた。

◇2018 年 12 月 16 日（日) 関西学院大学大阪梅田キャンパス

・马花力（大阪大学・院）:“别…（了）”结构的意义

本文在前人研究的基础上，首先讨论“别…（了）”结构的意义，通过对三组实例：（1）“别哭”、“别哭了”,（2）“别吃”、“别吃了”,（3）“别忘”、“别忘了”的分析，对能够进入“别＋V”和“别＋V＋了”结构的动词特性进行分析和总结，并对结构中“了”的特性以及隐现对意义的影响进行分析。其次，引出有一些形容词和名词也能够进入“别…（了）”结构的现象，并对能够进入结构的形容词和名词的特性进行分析。本文分析采用自主动词、非自主动词，句尾的“了 2”，补语性“了 3”和制止、防止等概念。

・呉婷（関西外国語大学・院）：浅论普通话与粤方言进行体标记“在”“紧”

每种语言都有自己的体系统，在体范畴、体标记使用范围上不尽相同。进行体是一种十分典型的体范畴，几乎存在于所有语言里。粤方言是中国七大方言之一，在体的表达上，体范畴更丰富，体标记数量更多，功能更细化。本发表以广府片粤方言为研究对象，在对普通话与粤方言的体系统进行一个整体比较后，通过搜集、整理、分析普通话与广府片粤方言的语料，从分布位置、动词连用搭配、与同系统中其他进行体标记的关系等方面，对“在”和 “紧”进行比较和分析，以揭示汉语普通话和粤方言在进行体表达上的异同。

・田中 智子（神戸山手大学）：美濃客家語の副詞“緊”が表す複数回性について

本発表は、客家語（高雄市美濃区で話されている客家語の一方言）の “緊 gin42”という副詞について考察する。“緊”は、次のような用法がある。（１）「継続」「持続」「進行」を表す、（２）頻度の高さを表す、（３）ある行為を真剣に行うことや、そればかりを行うことを表す。なお、（１）のような用法から、先行研究では、“緊”はアスペクトの一種とみなすものが多い。一方、本発表では“緊”を語彙的な要素と考え、その中核的な意味は事象の複数回性であると主張する。その中核的な意味に、本動詞の語彙的意味や文脈が付け加わり、上記の（１）から（３）のような用法が生じるのだと説明する。

［講演］

沈国威（関西大学・教授）：基本語彙と基本語彙化について――語彙体系の近代的再構築の視点から

語彙の教学では、基本語彙の特徴として穏固性、全民性、能産性がよく言及されるが、いずれも事の本質を捉えている議論ではない。「基本語彙」とは一物多名という言語の本質を反映する同義語群でのプロトタイプだと考える。但し「基本語彙」を語彙論の有効なタームとして使用するには、言語そのものにもっと目を向けるべく、認知言語学の範疇論、プロトタイプ論のあり方

を再考する必要がある。本発表は近代以降の知識の移動、言語接触、語彙交流、及び東アジア諸言語の語彙体系の近代的再構築という視点から基本語彙の本質とその近代形成史に迫る。それにより語彙体系の全体像が明らかになるばかりではなく、新しい学習法の展望も開かれる。

◆九州支部例会

◇2018 年 7 月 7 日(土) 熊本大学　黒髪北キャンパス

・王瑶（熊本大学・院）：“給”在近代前期變化－以『朱子語類』為中心－

“給”在現代漢語中的一般含義和用法，主要形成于清代。并且[kei]214 這個廣泛用于北方地區的讀音，其入聲的舒聲化方式也比較特殊。本文擬探討的核心問題是：“給”字在從上古到中古的一個過渡時期內，語義發生了怎樣的微妙變化？並對變化的條件加以思考，進而試闡述這些變化是否構成了“給”字演變的条件。『朱子語類』作為一部由學生盡可能忠實記錄老師的言論，並進行匯總而成的著作，可以說是反映當時口語的很好的材料。（木津祐子：2011）并且，成書時代在上古到近代的過渡期。故本文選擇了『朱子語類』作為語料，考察其中“給”的使用情況。尽管“給”在書中出現頻率不高，或已經開始顯露微妙的變化。

・王姝茵（熊本大学・院）：“姑娘”の語義及び機能の歴史的変遷について―明清時代の白話小説を中心として―

“姑娘”は明清時代で良く使われる親族呼称語であるが、この言葉の語義の変化は複雑である。初期の宋元時代の「父の姉妹」から清代中期の「地位が高い若い女性」という意味まで、この言葉がどう出現し、語義がどのように変化したのか。また、語義の変化に伴って、“姑娘”の機能がどう変わったか。さらに、“姑娘”の意味と機能の変化は他の類語に影響も与えているのか。本稿は“姑娘”の語義の変化を究明し、また、同時代の「若い女性」を呼ぶ呼称語の意味と機能の変化についても検討する。これにより、明清時代の親族呼称語の歴史変遷の特徴を探求する。

・宮雪（新潟大学・院）：“～过$_1$”と“～了$_1$”の文法的使い分けと意味的分析

“～过”と“～了”はどちらも動詞の後ろに付き、動結形として使用される。二つとも動作の完了の意味と認められる。“～过”と“～了”が動結形として使用される場合には、共通点が多いため、同じ構文の中でも、置き換えられる場合と置き換えられない場合がある。「完了」を表す“～过”と“～了”について、近年様々な観点から研究が行われているが、まだ検討する余地が残っていると考えられる。本稿では、両者の意味の分析を通し、どのような意味で両者が置き換えるのか、そして、置き換えられる場合にはどのようなニュアンスの違いがあるかなどの問題について論じていく。また、置き換えられない要因も研究範囲に入れ、詳しく分析して行く。

・張婉清（熊本大学・院）：≪醒世姻缘传≫中“真真”和“真个”的比较研究

根据白维国《白话小说语言词典》的解释，“真真”和“真个”都可以表示“的确、确实”之意。但是通过对《醒世姻缘传》全书进行考察，在具体的语句中，二者可以相互替换的情况却非常少。为什么二者语义相同，但是在《醒世姻缘传》中却很少能相互替换，二者存在什么样的差异性，二者不能替换的内在原因是什么。这是本文着力要解决的问题。本文以汉语语法研究中的三个平面语法理论为理论基础，从语义、句法、语用三个方面来对《醒世姻缘传》中的“真真”和“真个”进行共时比较，以期能够找出二者的差异性。同时对“真真”和“真个”进行深入分析，找出二者存在差异性的内在原因。

・謝平（福岡大学）：“心里惦记着孩子”と

“手上流着血”について

存現文の中には、「身体名詞＋V＋NP2」のような使用例が多く見られる。しかし、「身体名詞＋V＋NP2」という構文であれば、存現文であるというわけではない。例えば、“心里惦记着孩子”と“手上流着血”という例文は、両方とも「身体名詞＋V＋NP2」という形式を持っている。一見すると、どちらも存現文の形式である「NP1（場所）＋V＋NP2」に合っており、存現文のように見える。しかし、本発表では決して同じ構文ではないと考える。本発表は、まず存現文になる条件を再考察し、NP1 が身体部位である例文をベースにし、“手上流着血”は存現文であるが、“心里惦记着孩子”は存現文ではないことを論じる。

・秋山淳（下関市立大学）：中国語のNP1＋V＋R＋NP2構文（VR他動詞構文）の使役義解釈について

沈力(2014)では中国語の結果複合動詞が使役義を獲得することを因果連鎖（<ACT>＋CAUSE＋<BECOME>）の観点から考察を行っている。それによると、“武松打死了一只老虎”のような VR 他動詞構文の“打(V1)死(V2)”が使役他動詞となるのは統語構造で“死”が“打-<CAUSE>”の<CAUSE>の位置に移動することで、“打死”が<CAUSE>の意味を獲得すると分析している。しかし、“张三追累了李四(了)”(沈家煊 2004)のような使役・非使役の両方の解釈が可能なものの存在から、この分析に完全には同意できない。本発表は、VR 他動詞構文では V1、V2 それぞれの意味、NP1 や NP2 に現れる要素、コンテキストなどの百科事典的知識により使役義に解釈されると考える。

・植田均（熊本大学）：关于近代汉语的词义分类

现代汉语词汇的词义分类词典出版于 1988 年，但近代汉语词汇的尚未出版。笔者先把清代北方官话分为初期、中期和后期这三个阶段，然后再试对清代初期的代表性白话资料≪醒世姻缘传≫的词汇进行词义分类。现在还没完工，但已经把整理过程中碰到的几个问题梳理过，并作了报告。如词义分类上的难度：同样是表示人的词语，却出现在不同的大分类中，“马夫”属于交通的 J 组，“随从”属于社会交际的 D 组。此外，还有“扭嘴”不是把嘴扭过来的动作，而是表示示意，应该放在 F 组里的表情小组。又如“外人”(＝陌生人）放在小分类的“闲人”小组里面，按理说“外人”和“闲人”在一个小组恐怕不太合适。接下来，还包括一些记音词问题。

◇2018 年 12 月 1 日（土）福岡大学

・何潔（九州大学・院）：中国語の副詞“倒”と対応する日本語の表現

中国語の副詞“倒”は本来動詞から転じてきたものであり、多様な意味と役割を持つものである。副詞“倒”は、逆接、譲歩、詰問や催促、婉曲の語気など様々な意味を表すことができるため、文と文を繋ぐ接続の用法と話者の語気を表出する用法があるが、一見したところ共通点のない用法が一つの副詞で表出されていることが理解の難点となる。副詞“倒”に関する研究は多数あるが、それを日本語と対応させた表現に関する研究はまだ欠如しているため、本発表では、副詞“倒”が日本語とどのように対応しているかを明らかにする。

・宮下尚子（福岡大学）：『元刊雑劇三十種』にみえる“有”

『老乞大集覧・上』には「漢兒人有」という項目に「元時語必於言終用有字，如語助而實非語助，今俗不用」とある。この元代のいわゆる「句末の“有”」は、現代漢語において存現文を構成する動詞や、名詞等に先行してとりたてを行うものとは異なり、句末に置かれたり名詞に後置され、元代の公文書や蒙漢対訳文献に多用されるが、これが公文書や対訳文献とは直接の関係がない元曲元刊本や同時代の評話等にも用例があることは周知の通りである。本発表では、

一旦モンゴル語から離れて、『元刊雑劇三十種』にみえる“有”の用例と機能を整理し、「句末の“有”」についての発表者の見解を述べ検討したい。

・馮蘊澤（熊本学園大学）：統語成分（“句子成分”）という概念

「統語成分」（“句子成分”）という概念がある。文形成メカニズムを考える立場から見た場合、統語成分分析理論は意味的に不適格な文の生成を阻止できず、言語話者が内的に持っている「言語知識」を正しく反映していないことが分かる。統語成分と意味役割の間に対応関係があり、その関係は非対称性で、かつ、文の（事態）類型によって異なる。これらの事実がほとんど解明されていない点に問題がある。従って、文形成メカニズムの解明にとって、統語成分と意味役割の関係の解明がカギとなる。他方、いわゆる統語成分とは、事実上単に「位置」を表す概念であり、統語成分と意味役割の関係の解明は「位置」と「意味役割」の関係の解明を意味する。

会議報告

■ 2018 年度第 2 回理事会

日時：2018 年 11 月 2 日（金）16 時～18 時

場所：神戸市外国語大学三木記念会館［神戸市西区学園東町 9 丁目 1］

出席者：大西克也（会長）；三宅登之（副会長）；小野秀樹、佐々木勲人、竹越孝、山崎直樹、楊凱栄（以上理事）；宮本徹（大会運営委員長兼幹事）；鈴木慎吾（ウェブリソース委員長）；平田昌司（辞典編纂委員長）；戸内俊介、野原将揮（以上幹事）

欠席者：加藤晴子（以上理事）

■ 2018 年度評議会

日時：2018 年 11 月 3 日（土）10 時 15 分～11 時 45 分

場所：神戸市外国語大学三木記念会館

出席者：構成員 42 名（定数 61 名）

■ 2018 年度総会

日時：2018 年 11 月 3 日［土］17 時 30 分～18 時 30 分

場所：神戸市外国語大学大ホール

【議長選出】

議長に山田忠司会員（文教大学）、橋本永貢子会員（岐阜大学）を選出した。

【報告事項】

1. 一般報告

1.1 会員動向（10 月 1 日現在）

戸内幹事より以下の報告があった。

・会員数：（2017 年 10 月 1 日から 1 年間の増減：住所不明者、年度末退会予定者を含む）

			増減
総会員数（賛助除く）		1130 名	－94
（内訳）	顧問	5 名	±0
	名誉会員	20 名	－2
	通常会員	667 名	－51
	ネット会員	331 名	－22
	団体会員	7 名	±0
	海外会員	73 名	－18
賛助会員		22 社	－1

・〔昨年度除籍者〕42 名（国内会員 35 名 / 海外会員 6 名）［2017 年 11 月 15 日付］

・〔今年度除籍予定者〕63 名（国内会員 45 名 / 海外会員 18 名）
・〔ご逝去〕2 名（伊藤敬一名誉会員、今冨正巳名誉会員）
＊ 会員動向については、直近の数字ではなく、4 月 1 日付の状況を春の理事会に、10 月 1 日の状況を秋の理事会に報告する。［除籍者は 10 月中に確定］

1.2. 支部例会関連

戸内幹事より以下の報告があった。

・過去一年間の実績は『中国語学』265 号「彙報」を参照。
・支部例会開催通知はメールに移行、ハガキ希望の方には郵送を継続。
・関東支部例会世話人の交代
荒木典子会員から石村広会員への交代。

2. 編集委員会報告

秋谷委員長より以下の報告があった。

・『中国語学』第 265 号は、2018 年 10 月 31 日に 1,420 部発行した。
・『中国語学』第 264 号掲載論文からは学会奨励賞候補を推薦しないこととした。
・『中国語学』投稿申込表の導入及びそれに伴う「『中国語学』執筆要領」の一部改訂についての報告があった。
・新旧委員の交代について
任期満了：秋谷裕幸、石崎博志、橋本永貢子、王亜新
再任：竹越孝、遠藤雅裕、丸尾誠、雷桂林
新任：中西裕樹、千葉謙悟、森宏子、張佩茹

3. ウェブリソース委員会報告

鈴木委員長より以下の報告があった。

・ウェブサイトの SSL 通信に対応について
これにより、URL が https://ss1.xrea.com/www.chilin.jp/に変更になった。旧 URL へのアクセスは新 URL にリダイレクトされる。また、この措置により海外からのアクセス障害が解消された。

3. 大会運営委員会報告

宮本委員長より以下の報告があった。

3.1. 委員長・委員の交代について

① 次期委員長の選出
現任委員による互選により吉川雅之委員を次期委員長に選出した（9 月 26 日持ち回り委員会決定）。

② 委員の交代
退任：飯田真紀、石村広、下地早智子、鈴木慶夏、千葉謙悟、張盛開、宮本徹の各委員
新任：秋谷裕幸、伊藤さとみ（開催校）、*王周明、*奥村佳代子、濱田武志、前田真砂美、盧建の各会員（*王・奥村両会員については 11 月 9 日の持ち回り理事会にて承認）

3.2. 第 68 回全国大会準備状況について

3.2.1 ワークショップ及び研究発表審査結果

① ワークショップ応募・採択結果
5 月 31 日に応募締切。応募総数 2 件。審議の結果、下記の通り採用することに決定した（6 月 11 日持ち回り委員会決定）。
・「汉语方言和普通话里的声调特性和时长分布模式」（企画者：遠藤光暁会員）
・「域外資料から近代口語を問う――文献言語学の挑戦と課題」（企画者：吉川雅之会員）

② 研究発表応募・採択結果
・6 月 13 日に応募締切。応募総数 87 件。うち有効応募総数 81 件（不受理 3 件［入会手続未了 2 件、応募期間外応募 1 件］、規定違反による失格 2 件、辞退 1 件）。審査の結果、口頭発表 47 件、ポスター発表 11 件の計 58 件を採択した。不採択数は 23 件であった（7

月 13 日持ち回り委員会決定)。

3.2.2 プログラム公表後の変更点

8 月 6 日のプログラム公表後、下記の点についてプログラムに変更が生じた。

・口頭発表の発表者 1 名より、本務校業務により外国出張が困難となったため、発表を辞退したい旨の申し出があった。提出された理由書に基づき委員会で審議した結果、やむを得ない事情があると認め、辞退を承認した (9 月 12 日持ち回り委員会決定。第 2 会場)。

・招待講演者の崔希亮先生（北京語言大学）から開催校に対し、学内の事情により来日を取りやめざるを得なくなったとの連絡あった。これを受け、急遽開催校・事務局・委員会にて協議した結果、プログラムそのものは変更せず、当該講演を録画放映により実施することになった（10 月 24 日)。

3.2.3 その他

・予稿集の原稿は 1 名を除きすべて期限内に提出された。残り 1 名については、再設定した期限内に提出された。

・今年度より予稿集の編集作業は委員会が担うこととなり、3 名の委員がこれに当たった（10 月 30 日開催校納品)。

・託児所については 3 名が利用予定（10 月 10 日締切)。

3.3. 予稿集の電子化について

第一回理事会での承認を受け、予稿集電子化の具体的方策について検討を行った。その結果、以下の諸点について成案を得た（10 月 28 日持ち回り委員会決定)。

・電子化は第 69 回大会（2019 年度。開催校：お茶の水女子大学）から実施する。

・一定の移行期間を設け、その間は冊子体も同時に発行する。なお、冊子体の廃止時期については次期委員会において検討・決定する。

・電子版の公開は、e-naf へのログイン→リンク取得という方式を基本とする。これにより電子化に伴う経費の増大や大会運営の煩雑化を回避することができる。なお、この方式では大会への参加・不参加に関わらず会員であれば予稿集を閲覧できることになる。

・公開に向けての具体的な準備は、ウェブリソース委員会と連携しながら進めていきたい。

4. 辞典編纂委員会報告

平田委員長より編集作業の進捗状況および今後の見通しについての報告があった。

・今年度第 1 回理事会以降に、以下のとおり岩波書店編集部との協議を 2 回おこなった。第 1 回 : 8 月 1 日（平田委員長、大西会長、三宅委員、木津委員) ; 第 2 回 : 9 月 10 日（平田委員長)。

・作業の大幅な遅れにかんがみて、岩波書店からは、刊行予定を 2020 年 10 月とした場合の新しい進行計画表の提示があった。刊行に向けては、校正段階での作業を委員会および協力者が中軸となって担当するなどの努力が不可欠である。

5. 日本中国学会「学界展望」語学部門について

佐々木理事より「学会展望」について報告があった。

・日本中国学会「学界展望」語学部門が無事掲載された（『中国語学』265 号に掲載)。

・2018 年度（『中国語学』266 号掲載予定）の執筆者も 2017 年度と同じ執筆者が担当する。

6. 次期大会開催校の決定

大西会長より、お茶の水女子大学（東京都文京区）において 2019 年 11 月に開催する旨の報告があり、開催校の伊藤さとみ会員より挨拶があった。

7. 中国語学電子化について

秋谷委員長、鈴木ウェブリソース委員長より『中国語学』電子化について報告があった。

・電子版の公開方法と公開時期について

会員に対しては紙媒体発行後、即時電子版を公開する。J-STAGE でパスワード認証、ID・PW は e-naf で周知する。一年後、オープンアクセスで公開する。メタデータについては紙媒体発行後、即時公開する。

・関連規定の改定

電子化に伴い、「投稿規定」および「執筆要項」が改定された。改定後の「投稿規定」および「執筆要項」についてはニューズレター末尾の資料を参照。

8. 「中国語学セミナー（仮称）」開催に向けて

大西会長より「中国語学セミナー（仮称）」開催について報告があった。

・セミナーの概要

開始年度は年 1 回開催とする。夏季休暇期間の土日を候補として、ベテラン中心の 3 名の講師による 90 分の講座を 3 つ開く。また研究者人口と中国語教育に従事している会員が多いことに鑑み、初回（2019 年度）は現代文法や中国語全般を手厚く布陣する方向で検討する。

・予算

WG のシミュレーションに基づき、補正予算 20 万円を措置する。

・運営体制

「理事 1 名＋ウェブリソース委員長＋幹事 1 名」を充て職とし、必要に応じてさらに若干名の委員（役職者以外でも可）を加える。理事の委員は会長からの指名によるものとし、原則として委員長を務める。幹事のうち誰を委員に任命するかは、会長と幹事の合議により決める。3 年後を目途に運営体制を検討する。

9. 災害対応（会費免除）について

大西会長より災害対応（会費免除）について報告があった。

・他の関連学会と同様に、災害発生年度の会費を自己申告に基づき免除することとする。

・対象は「非常災害」に指定された災害において被災した（生活基盤に重大な損害を受けた）会員とする。

・2018 年度は「平成 30 年度 7 月西日本豪雨」の被災者を対象とする。既に納付された会費は平成 31 年度の会費に充当する。

・現在 3 年目となっている熊本地震被災者の会費免除は今年度限りとする。

【審議事項】

1. 予算案・決算案

1.1. 2017 年度会計決算案（資料参照）

緑川前幹事による報告と説明、及び朱鳳・林範彦会計監査による監査報告があり、報告の通り承認された。

1.2. 2019 年度会計予算案（同上）

宮本幹事による提案と説明があり、原案の通り承認された。

2017 年度会計決算書（2017 年 4 月 1 日～2018 年 3 月 31 日）2018 年 11 月 3 日総会承認

＜収入＞（単位:円）	予算	決算
前年度繰越金	9,318,548	9,318,548
積立金からの繰入金	2,560,000	2,560,000

通常会員･海外会員会費収入	6,500,000	5,802,000
賛助会員会費収入	690,000	630,000
『中国語学』売上金	402,533	402,533
予稿集売上金	450,000	525,280
印税（著作権使用料）	32,410	32,410
通常貯金利子		50
別刷追加分料金		4240
計	19,953,491	19,275,061
＜支出＞	予算	決算
会誌印刷費	2,000,000	1,318,736
予稿集印刷費	800,000	656,640
大会助成費	300,000	300,000
支部活動助成費	450,000	109,230
通信費	500,000	364,519
事務費	2,000,000	1,908,241
大会事務費	300,000	568,665
学会連合等年会費	42,000	42,000
事務局費	350,000	350,000
編集委員会経費	120,000	120,000
ウェブリソース委員会経費	120,000	109,250
ホームページ関連経費	180,000	37,618
大会運営委員会経費	220,000	100,000
辞典編纂委員会経費	180,000	0
旅費交通費	600,000	859,000
会議費等雑費	180,000	158,897
学会奨励賞	100,000	100,000
選挙関連経費	100,000	0
積立金	2,600,000	2,600,000
［内訳］		
記念大会積立金（34 万）		
事務委託関係積立金（126 万）		
ウェブサイト構築積立金（50 万）		
国際会議開催支援積立金（50 万）		
予備費	8,811,491	9,572,265
計	19,953,491	19,275,061

監査の結果、経理内容は適正であり、経理諸表は適確に処理されていることを認めます。

2018 年 10 月 19 日

2017 年度会計監査　朱　　鳳
2017 年度会計監査　林　　範彦

2018 年 12 月

2019 年度会計予算案（2019 年 4 月～2020 年 3 月）　2018 年 11 月 3 日総会承認

＜収入＞	
前年度繰越金	7,439,491
積立からの繰入金	2,640,000
通常会員･海外会員会費収入	6,000,000
賛助会員会費収入	660,000
『中国語学』売上金	400,000
予稿集売上金	450,000
学会展望補助金	300,000
計	17,889,491

＜支出＞	（単位:円）
会誌印刷費	2,000,000
予稿集印刷費	800,000
大会助成費	300,000
支部活動助成費	300,000
中国語学セミナー開催経費	200,000
通信費	500,000
事務費	2,000,000
大会事務費	300,000
学会連合等年会費	42,000
事務局費	450,000
編集委員会経費	120,000
学会展望関連経費	300,000
ウェブリソース委員会経費	120,000
ホームページ関連経費	180,000
大会運営委員会経費	220,000
辞典編纂委員会経費	180,000
旅費交通費	700,000
会議費等雑費	180,000
学会奨励賞	100,000
国際会議開催支援金	500,000
選挙関連費	100,000
積立金	2,280,000
［内訳］	
記念大会積立金（38 万）	
事務委託関係積立金（130 万）	
ウェブサイト構築等積立金（50 万）	
国際会議開催支援積立金（10 万）	
予備費	6,017,491
計	17,889,491

例会および全国大会開催、IACL-27 開催のお知らせ

今年度の例会実施予定

各支部における今後の例会実施予定は次のようになっています。

北陸支部：2019 年 3 月 16 日

支部例会の発表者、参会者ともに歓迎します。発表者の方には発表要旨（300 字以内）の事前提出をお願いしています。この要旨は、学会ウェブサイト上の例会案内のページで紹介し、年に 2 回発行の学会ニューズレターにも掲載されます。

なお、開催予定は変更になることがありますので、詳細は各支部例会世話人までお問い合わせ下さい。担当者の連絡先については、学会ウェブサイトをご参照下さい。

（事務局）

第 69 回全国大会開催のお知らせ

日本中国語学会第 69 回全国大会は、2019 年 11 月初旬（具体的な日時は未定）にお茶の水女子大学東京都文京区）にて開催されます。ワークショップの応募要項は 2019 年 1 月末までに、また一般研究発表の応募要項は 2019 年 4 月初旬までに学会ウェブサイトに掲載される予定です。

（第 69 回全国大会準備会）

IACL-27 開催のお知らせ

国際中国語言学学会第 27 回年次大会（IACL-27）が、2019 年 5 月 10 日（金）～12 日（日）、神戸市外国語大学にて開催されます。日本では IACL-11（愛知県立大学）以来 17 年ぶりの開催となります。

研究発表を希望される場合は発表要旨、YSA（青年学者奨）を希望される場合は論文全文を作成の上、2019 年 1 月 10 日（木）までに所定の方法でお申し込み下さい。詳細については、

http://www.iacl27kobe.net/index.html

をご参照下さい。

なお、IACL-27 の参加には登録と参加費の支払いが必要ですが、初日の招待講演に限り、日本中国語学会の会員であれば無料で聴講することが可能です。詳しくは本学会及び上記 IACL-27 ウェブサイトにて告知いたします。

会員の皆様の積極的なご参加をお待ちしております。

（IACL-27 組織委員会代表　竹越孝）

『中国語学』電子化のお知らせ

2016 年 11 月以来 2 年間にわたり編集委員会・ウエブリソース委員会を中心に検討を続けてまいりました『中国語学』電子化が今年 11 月の理事会・評議会・総会において承認されました。これを受け『中国語学』は来年 10 月末に出版予定の第 266 号から紙媒体と共に電子版でも刊行されます。具体的には以下の通りです。

(1) 当面は電子版と紙媒体を併存させる。
(2) 電子版は紙媒体と同時に刊行する。
(3) 電子版の刊行後 1 年間は学会会員のみがアクセス可能となるよう制限をかける。
(4) ただし、論文タイトル ・ 執筆者氏名 ・ 論文要旨等のメタデータおよび学界展望は、即時オープンアクセスとする。
(5) 電子版刊行の 1 年後、会員限定のアクセス制限を解き、オープンアクセスとする。

『中国語学』第 266 号に論文を投稿する会員各位におかれましては、以上をご理解の上で投稿していただければと思います。

事務局からのお知らせ

■ 住所不明の会員

お知り合いの方がおられましたら、ご連絡をお願いします。

荒屋 勸、乾 俊文、于 姝君、上野 倫代、王 燕、王 玉、王 笑飛、王 煒煒、賈 智、簡 靖倫、許 芸涵、嚴 馥、胡 貴躍、吴 婷、江 氷燕、崔 盼盼、沈 德思、朱 美英、蕭 景浚、薛 晨、張 軼欧、張 群、張 晨迪、陳 昭宜、陳 述、陳 家隽、陳 相偉、東 会娟、董 雪嬌、湯 明昱、中野 尚美、西坂 祥平、布川 雅英、林 文慧、山下 輝彦、湯山 トミ子、楊 立明、楊 鉄錚、楊 洲、楊 沐藝、李 穎清、李 婷、李 藝、劉 乃華、劉 玲、令狐 菁菁
（敬称略）

■ 2018 年度会費納入のお願い

会費未納の方には、11月に振込用紙を同封して納入依頼のご連絡をお送りしました。年会費（一般会員6,000円、ネット会員5,000円）を最寄りの郵便局からお振込下さい。速やかにご入金下さいますよう、御協力をお願いします。

郵便振替　加入者名：日本中国語学会
口座番号：00980-6-282216

■ 退会について

退会は有資格年度の会費納付が前提となっています。退会希望の方は、必ず会費納付後の年度内にお申し出下さい。３月末日までにお申し出がない場合には、会員資格が新年度に継続されますので、ご注意ください。

■ 顧問・名誉会員の推挙

顧問・名誉会員の推挙は、推薦文を添えて2019年9月30日までに学会事務局宛にお願いします。

■ 予稿集の販売

過去の大会予稿集は好文出版にてお求めになれます。第61回までは1500円、それ以降は2000円となっています。詳しくは学会ウェブサイトをご覧下さい。在庫につきましては好文出版（order@kohbun.co.jp）に直接お問い合わせ下さい。

■ 事務局の連絡先

各会員の登録情報は、学会ウェブサイト（https://ss1.xrea.com/www.chilin.jp/）内の e-naf（オンライン会員情報管理システム）から、会員ご自身でログインして確認と更新ができます。事務局への問合せは、学会ウェブサイトの「お問い合わせ」ページをご利用下さい。

事務局への郵便物は、下記あてにお願いします。

〒113-0033
東京都文京区本郷7-3-1
東京大学文学部中国語中国文学研究室内
日本中国語学会事務局

［資料 1］

『中国語学』投稿規程（2018 年 11 月改訂）

一．掲載原稿

(1)投稿原稿

『中国語学』には会員から投稿された次の原稿（以下「投稿原稿」）を掲載する。投稿原稿は，本規程の二.から八.に定めた手続きに基づいて掲載される。

・研究論文…オリジナルな知見を含む学術論文。

・資料…新たに発見された重要資料の紹介・解説。

(2)依頼原稿

投稿原稿以外に，編集委員会が会員または非会員に執筆を依頼した研究論文，展望論文，書評・紹介などを掲載することがある。

二．投稿条件

投稿原稿は次の条件を満たしていなければならない。条件を一つでも満たさないものは受理されない。また，査読中あるいは掲載前に条件が一つでも満たされないことが判明した場合は投稿自体を無効とする。

(1)著者（共著の場合は筆頭著者）が 3 月 10 日（投稿受付締め切り日）時点で日本中国語学会の会員であり，かつ会費未納がないこと。

(2)未公刊であり，かつ『中国語学』以外の雑誌等に投稿中でないこと。学会の予稿集や科学研究費補助金研究の報告書に掲載されたもの，未公刊の修士論文・博士論文の一部などは，その旨を添付表紙に記載すれば投稿できる。

(3)別途定める「『中国語学』執筆要領」を遵守していること。

(4)「『中国語学』投稿に関する誓約書」（以下「誓約書」）を提出すること。

三．原稿の提出

投稿原稿は以下の要領を遵守し，提出するものとする。

(1)原稿の提出は電子メールによる。Word 形式と PDF 形式両方の電子データを，編集委員会のアドレス bianwei■chilin.jp（■を@に代える）まで送付すること。

(2)原稿の電子データは 2 月 20 日以降 3 月 10 日(日本時間 24 時)以前に送信すること。

四．誓約書の提出

(1)誓約書の提出は電子メールによる。自署した誓約書の画像データ（JPG、JPEG 等）を編集委員会のアドレス bianwei■chilin.jp（■を@に代える）まで送付すること。

(2)誓約書の電子データは 2 月 20 日以降 3 月 10 日(日本時間 24 時)以前に送信すること。

五．査読と採否の決定

(1)編集委員会は，投稿原稿が扱う領域の研究者（1 編につき 3 名，非会員を含むことがある）を査読者として選び，評価を委嘱する。編集委員会は，査読者の評価及びコメントをふまえて，投稿原稿が次のいずれであるかを決定する。採否の結果は，査読者のコメントとともに，6 月上旬までに投稿者に通知する。

・採用（必要に応じて若干の修正を加えた上で掲載する。）
・要二次審査（1 か月の修正期間で修正された原稿の内容を編集委員会が確認し，最終的な採否を決定する。）
・不採用

(2)「採用」の場合は，編集委員会が通知した期日までに，最終原稿の電子データを編集委員長宛に送付する。

(3)「要二次審査」の場合は，編集委員会が通知した期日までに，修正原稿と修正内容リストの電子データを編集委員長宛に送付する。編集委員会は修正内容を確認し，採否を最終的に決定する。その際，査読者に意見を求める場合がある。二次審査の結果，「採用」になった場合は，編集委員会が通知した期日までに，最終原稿の電子データを編集委員長宛に送付する。

(4)サマリー・キーワードを含む最終原稿は「『中国語学』執筆要領」に定められた分量を遵守しなければならない。

六．校正，印刷

(1) 校正段階での内容の変更・追加に関わる修正は，原則として認めない。

(2) 印刷に当たり，特殊活字や図版の作成のため，追加の費用を要した場合は，投稿者にその費用の負担を求めることがある。

七．ウェブでの公開

採用された投稿原稿，ならびに依頼論文の本誌掲載に当たっては，これを学会がウェブ上で公開することに著者が同意したものとみなす。その際，学会は以下の 2 点を遵守する。(1)著者の氏名を付記する。(2)著者の了解なしに論文（サマリーを含む）の内容に変更を加えない。

八．その他

(1)論文の採否や査読コメントに関する問い合わせには一切応じない。

(2)原稿料は支払わない。

［資料 2］

『中国語学』執筆要領（2018 年 11 月改訂）

1. 使用言語

◇ 投稿原稿の使用言語は，日本語，中国語，英語のいずれかとする。

◇ 本文，タイトル，サマリー，キーワード，引用例の訳文に用いる言語は，それぞれ次のように定める。執筆者の母語以外で書いた部分については，信頼できる母語話者の校閲を経たものでなければならない。

本文	タイトル・執筆者氏名	サマリー・キーワード	本文とは異なる言語の引用例の訳文
日本語	日本語・中国語・英語（3 言語）［注］	論文冒頭：中国語 論文末尾：英語	日本語
中国語	中国語・英語（2 言語）	論文冒頭：中国語 論文末尾：英語	中国語
英語	英語・中国語（2 言語）	論文冒頭：英語 論文末尾：中国語	英語

［注］英語のタイトルと執筆者氏名は，『中国語学』英文目次に掲載します。

2. 英語のタイトル，サマリー，キーワードの提出

◇ 本文に日本語または中国語を選択した場合，英語のタイトル，サマリー，キーワードは，採用または要二次審査となった者のみが，査読結果通知後，編集委員会が指定した期日までに別途提出する。なお，日本語と中国語のタイトル，サマリー，キーワードは投稿時に提出する。

3. 論文本体の書式と分量

◇ 論文本体は，学会ホームページに掲載されている「原稿テンプレート」ファイルを使用して作成する。「原稿テンプレート」の書式を遵守していない投稿は一切受理しない。

［参考数値］テンプレートの書式は以下の設定である。

■全体

ページの上下左右の余白（用紙 A4 縦）：上 67.5mm，下 67.4mm，左右 40 mm

行数（1 頁あたり）：31 行，　文字数（1 行あたり）：33 文字

■文字ポイント

タイトル：13.5 ポイント，　著者氏名：11 ポイント

アブストラクト：8.5 ポイント，アブストラクト文の左右の字落とし：本文の 2.5 字分

節見出し：9.5 ポイント

本文：9.5 ポイント

文末注：8 ポイント，　注の 2 行目以降の字落とし：2 文字分

参考文献：8 ポイント，　参考文献の 2 行目以降の字落とし：2 文字分

■文末アブストラクト

タイトル：13.5 ポイント

本文：8.5 ポイント，　本文の左右の字落とし：アブストラクト 31 文字分を中央揃

■行の開き

タイトルの上：1 行，　著者氏名の上：2 行，　キーワードの下：2 行

◇ 本文中の注番号のみ，1 字分の肩に上付きで半カッコを付して「3)」のようにつける。

◇ 論文本体は，上記の書式でプリントアウトして 19 ページ以内となるようにする。

◇ 図表のある場合は，その内部の文字（地図の中の記号などは除く）は原則として 6 ポイント以上とする。表の場合は文字数や行数を大幅に増加させてはいけない。なお，図表や参考資料がある場合には，それらを含めて規定のページ以内におさまるようにする。

◇ 日本語，中国語をローマ字化する場合は，日本語はヘボン式（長母音は ei 以外は字母をかさねる），中国語はピンインを原則とする。その他の非ローマ字は特別な必要がない限りローマ字転写する。

◇ 本文の文字フォントについては，日本語については「明朝体」，中国語については，簡体字は「SimSun」，繁体字は「MingLiu」または「SimSun」を，欧文は「Times New Roman」を用いることが望ましい（但し，本文が日本語で中国語の引用例が繁体字である場合，引用例は「明朝体」を用いてもよい)。なお，文字強調の際は，日本語については「ゴシック体」，中国語については，簡体字は「黒体」，繁体字は「黒體」を，欧文はイタリック体を用いることが望ましい。

やむを得ず特殊なフォントを使用する場合は，その旨が分かるように編集委員会宛にメモなどを添える。

4. 投稿原稿の構成

◇ 投稿原稿は「『中国語学』投稿申込表」（以下「申込表」）と「論文本体」からなる。

◇ 提出の際は，「申込表」と「論文本体」の電子データを bianwei■chilin.jp（■を＠に代える）まで送付する。「申込表」と「論文本体」の電子データは，Word 形式と PDF 形式の両方を提出する。「申込表」は中国語学会サイト内の「『中国語学』投稿申込表」テンプレートを使用すること。

4-1.本文が日本語の場合

(1) 論文本体（下記 6 を含まず 19 枚以内，ページ番号をつける）（執筆者名，所属機関名など，執筆者を特定し得る事項は書かないこと）

1. 日本語の論文タイトル
2. 中国語のサマリー（300 字以内），キーワード（3 個以上 5 個まで）
3. 本文
4. 注
5. 参照文献一覧
6. 英語の論文タイトル，サマリー（100 語以内），キーワード（3 個以上 5 個まで）[査読結果通知後に提出する]

4-2. 本文が中国語の場合

(1) 論文本体（下記 6 を含まず 19 枚以内，ページ番号をつける）（執筆者名，所属機関名など，執筆者を特定し得る事項は書かないこと）

1. 中国語の論文タイトル
2. 中国語のサマリー（300 字以内），キーワード（3 個以上 5 個まで）
3. 本文
4. 注
5. 参照文献一覧
6. 英語の論文タイトル，サマリー（100 語以内），キーワード（3 個以上 5 個まで）[査読結果通知後に提出する。]

3-3. 本文が英語の場合

(1) 論文本体（下記 6 を含まず 19 枚以内，ページ番号をつける）（執筆者名，所属機関名など，執筆者を特定し得る事項は書かないこと）

1. 英語の論文タイトル
2. 英語のサマリー（100 語以内），キーワード（3 個以上 5 個まで）
3. 本文
4. 注
5. 参照文献一覧
6. 中国語の論文タイトル，サマリー（300 字以内），キーワード（3 個以上 5 個まで）

5. 注意事項

(1) 投稿時には謝辞のたぐいを書いてはならない。（謝辞は印刷初校段階において，執筆要領に示す制限枚数の許す範囲内で加えてよい。）

(2) 論文の本文および注に，執筆者名，所属機関名など，執筆者を特定し得る事項は書かないこと。（例えば，「筆者はΔΔ2011 において…」（ΔΔは筆者の姓）のような書き方もしないように留意する。）

(3) 同一著者による同一年の論著は，「潘悟云 2001a」，「潘悟云 2001b」のように，出版年の後にローマ字を加えて区別する。

(4) 本文や注の中で参照文献に言及するときは，「太田 1958：21-25」のようにページまで指示する。参照文献の著者が中国人・韓国人である場合は姓名を記し，他は特別な場合を除き姓のみを記す。同姓の著者は名まで記し，欧文の場合は，ファーストネームのイニシャルで W. Simon, H. Simon のように区別する。

(5) 原稿の種別を問わず，注は半角アラビア数字を用いて通し番号とする。

(6) 参照文献は，本文または注において引用・言及されたもののみを言語ごとにグルーピングし，以下の体裁に準じて日本語文献は五十音順に，中国語文献はピンイン順に，欧文文献はアルファベット順に記載する。

日本語文献

有坂秀世 1943.「音韻論」，博士学位論文，東京：東京帝国大学。
太田辰夫 1958.『中国語歴史文法』。東京：江南書院。
高田時雄（未刊）.「漢字の西方波及」，高田時雄（編）『漢字文化三千年』。京都：臨川書店。
平山久雄 2000.「「給」の来源―「過与」説に寄せて」，『中国語学』247：56-70 頁。
内田慶市，氷野善寛（編著）2016.『官話指南の書誌的研究』。東京：好文出版。

中国語文献
方经民 2003.《现代汉语空间方位参照系统认知研究》，博士学位论文，上海：上海师范大学。
吕叔湘 1992.《理论研究和用法研究》，中国语文杂志社编《语法研究和探索（六）》: 1-3 页。北京：语文出版社。
潘悟云 2001.《反切行为与反切原则》，《中国语文》第 1 期：99-111 页。
平田昌司（主编）1998.《徽州方言研究》。东京：好文出版。
秋谷裕幸（待刊）.《閩東區寧德方言音韻史研究》。臺北：中央研究院語言學研究所。
张伯江，方梅 1996.《汉语功能语法研究》。南昌：江西教育出版社。

欧文文献
Endo, Mitsuaki. 2016. “Sun” in Tai-Kadai. Mitsuaki Endo (ed.), *Studies in Asian Geolinguistics I*. Tokyo : Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa (ILCAA). https://publication.aa-ken.jp/sag1_sun_2016.pdf. 18-19. (accessed 2017/09/05)
Hashimoto, Mantaro. 1986. The Altaicization of Northern Chinese. In John McCoy and Timothy Light (eds.), *Contributions to Sino-Tibetan Studies (Cornell Linguistics Contributions)*. Leiden: E. J. Brill. 76-97.
Li, C. N., and Thompson, S. A. 1989. *Mandarin Chinese: A functional reference grammar.* London and New York: University of California Press.
Norman, Jerry. 1988. *Chinese.* Cambridge: Cambridge University Press.
Postal, Paul. 1970. On the Surface Verb "remind". *Linguistic Inquiry* 1: 37-120.
Sag, Ivan. 1976. Deletion and Logical Form. Ph.D. diss., MIT, Cambridge, Massachusetts.
Zwartjes, Otto. forthcoming. *Revitalising older linguistic documentation: Portuguese missionary grammars.*

6. 引用例の出典

◇ 引用例の出典は「参照文献」の後ろに列挙すること。
◇ 現代語文献からの引用例は，出典を明記する。（論証のキーとなる用例にはページも明記するのが望ましい。）
◇ 史的文献からの引用例には，出典，版本，ページを必ず明記する。なお，現代の刊行物ではない写本・刊本等から引用した場合であっても，出典を明記した上で，例えば巻数（或いは冊数），丁数といった引用箇所についての情報を具体的に示すこと。例：萬曆本《金瓶梅・第 17 回》9b,10

◇ 筆者の母語以外の言語による作例は，信頼できる母語話者の校閲を経たものでなければならない。

◇ 用例番号および括弧には半角を使用する。

7. 引用例の訳文

◇ 本文以外の言語の引用例には，本文と同じ言語の訳を付す。（例えば本文を日本語で書く場合，日本語以外の言語の引用例には日本語訳を付す。）文学作品等から引用された用例で長いものは，論証に不可欠と思われる箇所に下線を引き，その箇所の訳文のみを付す。

訃　報

本学会名誉会員である今冨正巳先生（東洋大学名誉教授）におかれましては、2018年4月10日に96歳の生涯を閉じられました。ここに会員各位にお知らせするとともに、永年にわたって本会ならびに斯学の発展に寄与された先生の多大な功績とご尽力に感謝し、心からご冥福をお祈り申し上げます。

2018年12月

日本中国語学会会長　大西 克也

日本中国語学会々報　2018年冬季

（年二回発行）

発行者：日本中国語学会事務局

〒113-0033

東京都文京区本郷7-3-1

東京大学文学部中国語中国文学研究室内

E-mail: jimukyok_clsj@chilin.jp

URL:https://ss1.xrea.com/www.chilin.jp/

発行日：2018年12月22日